

2018
おもろ
チャレンジ

プラナカン文化に見る

マレーシアの多民族共生文化についての考察

経済学部 1年

中井 拓海

マレーシア

2019年2月12日-

2019年3月21日



渡航概要と内容

現在少子高齢化が加速している日本には将来的に労働力として多くの移民が訪れ、単一民族国家である日本では他民族との共生において課題が生じるであろうとの予測から、多民族国家であるマレーシアがどのように形成され、文化の違う民族同士がどのようにお互いを受容しあってきたのかを調査した。また、将来東南アジアでのビジネスを考える身として、東南アジアにおいてビジネス面で成功を収めている華僑に興味を持ち、マレーシアにおいて中華系民族がどのように成功を収めたのかを調べた。

シンガポールからマレーシアへ陸路で入国し、マレー半島を北上しながら調査をした。まず、現地の博物館や資料館を訪れ資料を読み漁った。数が多いため個々の施設名は割愛するが、マレー系の博物館や中華系の博物館など一方向からではなく多方面から見たマレーシアの形成の過程について知った。また、現地の博物館や資料館を訪れるだけでなく、自分の足で町を歩いたり、現地の屋台などローカルフードを食べられる場所で食事をしたりしてみるなどして、五感をフルに使い調査した。調査方法は一言でいうと「現地民として実際に生活してみる」である。観光旅行をしている観光客としての視点ではなく現地民としての目で物事を考えられるように努めた。滞在都市は南から順にジョホールバル・バトゥバハト・マラッカ・クアラルンプール・イポー・タイピン・アロースター・ペナン・ランカウイである。

日本との文化の違いから苦労したことは、日本と違い時間にルーズなことである。例えば高速バスが30分遅れて出発するなどは当たり前であり、スケジュールに余裕を持たせることで、そういうものだと諦めがついた。それ以外は特にはない。

渡航中大きなトラブルに巻き込まれることはなかった。旅の中で一番困ったことは、公共交通

機関の発達していない場所で遠出する際は grab という白タクを使用していたのだが、都市部から離れた場所に行き帰ろうとした際に grab を呼んでも来ず、周りの人も英語が通じずこのまま帰れないのではないかと心配になったことである。都市部の有名であろう建物の名前を連呼することでバス停まで案内してもらうことに成功し、なんとか帰ることができた。また、お金貸してくれと言って話しかけてくる詐欺には何度か遭遇したが強気で追い払った。



現場となった郊外の写真

渡航を通じて感じたこと・学んだこと

実際にマレーシアに入国し多民族国家なのだと実感した。事前に学んでいた知識として、公務員はマレー系しかねないという情報を仕入れていたが、実際に入管や警察官などの職業はマレー系でその通りであり、民族によって仕事が分けられていた。中華系は様々な職で見られたが、どちらかという人と使う側によく見られ、インド系はレストランやホテルスタッフによく見られた。



街中では様々な民族が混在しているかのように見られたが、実際に街をくまなく歩いてみると民族ごとに居住地が分かれていることが分かる。いわゆるチャイナタウンやリトルインディアと呼ばれる地域である。最初は居住区が分かれているということはマレーシアが多民族融和であるとは言えないのではないかなどと考えたが、約1カ月の間マレーシアで生活するにつれ、実際に多民族が暮らしていくにはある程度の住み分けは必要であるとの結論に至った。むしろそれこそが多民族国家形成の秘訣であるとの考えにもなった。一般にマレー系の多くはイスラム教徒であり、豚肉を食べない。しかし中華系の料理には豚肉を使用するものも多い。このように文化がとても異なる民族同士が同じ場所で生活することは難しい。そのような混在地域で店を開く場合どちらに合わせるかなどといった問題もあり、町の発展といった面からみても効率が悪い。日本が今後移民を受け入れることになった際も、違った文化を持つ民族を受け入れ共存するには住み分けは不可欠であろう。



豚肉の売っていないスーパー



ペナンのチャイナタウン



豚肉の売っていないスーパー



イポールのリトルインディア

中華系が東南アジアでのビジネスにおいて成功した要因は広い視野で世界の需要を認識し貿易に力を入れたことと、薬に関する知識を持っていたことが大きいと考える。例えばマレーシア最南部のジョホールバルでは中華系民族はガンビールの生産・輸出で財を築いたことが分かった。ガンビールは整腸剤などに使用される植物である。また、中華料理には肉骨茶や中国茶といった漢方が使用されている物が多くあり、それも中華系民族が成功した要因の一つではないかと考える。実際に暑さで疲労困憊のときに肉骨茶を食べてみたのだが、疲れがとれ力がみなぎってきた気がした。嘘のようだが本当の話である。



肉骨茶と飲茶

■ 今回の経験をどのように今後生かしていくか

将来ビジネスを始めるつもりであり今回の経験を活かせると思う。国内でのビジネスでは移民の労働力を活用する可能性があるため、多民族国家を経験したこの旅を活かせる。また、海外でビジネスをするなら東南アジアを考えているため、マレーシアで約1ヵ月過ごし五感で感じ取った経験を活かせるはずである。

■ 今後本プログラムを希望する学生へのアドバイス

現地ではホテルではなくゲストハウスに泊まることをおすすめする。たしかに値段が安い分プライバシーや衛生面はホテルに比べて劣るが、同じ宿に宿泊する他の旅行者との交流ができ、日本人には思いつかないような考えに触れられるし、旅の情報も得られる。もちろん使用する言語は英語なので英語のスピーキング能力の向上も見込める。

■ 主な奨学金の使途

*宿泊費

*現地生活費（主に食費）

*渡航費

*現地交通費・調査費

*海外旅行保険 など